

粘りの追い上げ 誇らしく



試合終了直後、甲子園出場の目標に届かず、涙を流す八学光星の応援団
＝24日、弘前はるか夢球場

夏の高校野球決勝 光星応援スタンド

ナインに惜しみない拍手

弘前はるか夢球場で24日に行われた第107回全国高校野球選手権青森大会の決勝。第2シードから勝ち上がった八戸学院光星だったが、昨夏準Vの弘前学院聖愛に逆転負けを喫した。甲子園への切符を逃したものの、部員や保護者、生徒で埋まった応援席からはナインの粘り強い追い上げや昨秋以降の成長に惜しみない拍手が送られた。

(磯野雄太郎、上村八悟)

現チームは昨秋や今春の県大会でいずれも準優勝。悔しさをバネに春季東北地区大会で準優勝して自信を深めると、離脱者が戻って調子が上がった今大会は、準決勝まで全試合コールド勝ちし、決勝まで駒を進めた。

バックネット裏では約70人の保護者が見守った。逆転を許し、3点を追う九回。山上春人主将が2点適時打を放ち、1点差に追い上げた。父の尚さん(51)は「悔しいけど、感謝の気持ちでいっぱい。親が教えられないうことを野球が教えてくれたと思う。こうして近くで成長を見られてうれしい」と誇らしげに語った。

父母会会長の沢目浩人さん(50)＝十和田市＝は最終盤の粘りに「感動させてもらった。この粘りが今後、彼らの人生の実りになる」と瞳を潤ませた。

メンバー入りがかなわなかった約100人の硬式野球部員と生徒約530人は三塁側スタンドから懸命に声援を送った。試合終了直後、部員はおえつを漏らし

たり、現実を直視できずうなだれたり、悔しさを隠しきれない様子だった。応援団長を務めた大久保恒星さん(18)は「何も考えられないくらい悔しい」とぼつり。3年間メンバーに入らず、それでもナインの力になると自ら団長に立候補した。「最後まで粘り

強く戦ってくれたと思う。甲子園には行けないけど、団長をやつてよかった」と目を赤くした。生徒会長の佐藤向葵さん(18)は「二丸となって応援してみんなで戦えたことがよかった」と全員の頑張りに目を細めた。